

○1番（朝長 勇君）〔登壇〕

（全般モニター使用）皆さん、こんにちは。議長より登壇の許可をいただきましたので、1番朝長勇の一般質問を始めさせていただきます。

今回の質問項目についてはですね。あ、その前にですね、もう4番バッターと言いますか、ラストバッターということで、前回の、先日の野球大会よろしくですね、内野安打をねらっていきたいと思っております。

それで、きょうは大きく2つ。教育についてと市内の人材活用についてをあげさせていただきます。

まちづくりは人づくり、人づくりはまちづくり、といわれますように、中長期的な観点で見た場合に、教育そのものがまちづくりであるといえるくらい重要なものであるということで、私も教育っていうのを大きなテーマとして取り上げさせていただきました。

まずですね、反転授業について取り上げておりましたけれども、これは直前の上田議員をはじめですね、複数の議員さんが取り上げられて、もう内容については網羅的に……（発言する者あり）こう紹介されていると思いますので、これについては、感想と言いますかそれを述べさせてもらって、次にいきたいと思います。（発言する者あり）

あと人材育成については、中途採用の職員の能力等の活用についてお尋ねしていきたいと思えます。

教育についてですね、ちょっと準備作業をしていく中で、非常に私としては懸念を感じる問題と言いますか、これは道德に関する問題なんですけれども。これについてですね、ちょっと掘り下げて、私の考えを述べさせていただきます、教育長そして市長にもちょっと私の考えについての見解を求めてみたいと思っております。（発言する者あり）よろしくお願ひします。

反転授業についてですけれども、内容については、もう先ほどの質問でも出ていましたと思いますので。内容について私としてどう感じているかと言いますと、まずはですね、子どもの適性とか能力。要はできる子、できていない子っていうのが素早く把握できることによって、理解度に応じたきめ細かい対応ができる、そういう教育が行える。または、早くできた子どもが遅れている子どものフォローをしたりして、子ども同士のコミュニケーションとか連帯感、そういうものを育むという多面的な効果がある、期待できると感じております。

ただですね、教育というのは保護者、地域の協力が当然不可欠になると。この一般質問等……（発言する者あり）議会等を見ている方はですね、ある程度反転授業について、どういうものか、どういう効果があるのかというのは理解していただけたんじゃないかなと私自身も思っておるんですけれども。

やはり保護者にとっては、まず不安というのは、何が不安かっていうのは、新しいものに対する、知らないわからないという不安と、わかったにしても、それでもうちの子はついて

いけないんじゃないかとか、そういう不安をどうしても抱く。その辺の細かいフォロー、子どもに疎外感を与えない。そういうフォローが非常に大切になってくると思います。

これについても、各校で説明会を開いていくと。詳しく説明していくということで、とにかく3月まで、新しい取り組みを4月から始めるということで、今から3月までの準備態勢と言いますか、順調なスタートを切るために教育長を初めですね、を先頭にして、教育部がまとまって、その思いと言いますか、これを共有してですね、各学校に伝えてその熱意と言いますか、それをしっかりこう保護者に伝えていって、万全の体制で4月、新学期を迎えていただくようお願いしたいと思いますが、この点について、ひと言教育長からお言葉をいただきたいと思います。よろしくをお願いします。

○議長（杉原豊喜君）

浦郷教育長

○浦郷教育長〔登壇〕

代田教育監も熱意いっぱいに答弁されておりますとおり、すでに議会終わった後も夕方まで出かけてですね、説明会をしてもらっております。そういう意気込みで進めたいと思っております。

3点だけ申し上げます。

1つは、前言いましたように、やや武雄市の子どもたちにとって苦手であった家庭学習の時間、これと連動して高めていきたいというのが1つ。

それからもう1つは、タブレットの導入だけが話題になりがちだったこの大きな事業に、その学習方法の改善という、連動して進めることができるというこの2点目。

3つ目は、私どもにしましても、何かいろんな会議にしましても、前もって準備があるときの参加というのは、やはり期待もし、課題も持っていくわけでありますので、事前にそれだけの学習をもって、予習をして教室に臨むという子どもたちの学習意欲は当然高いわけでありますし、学力にも帰結するものであろうと。

この3点をもって、さらに教育監先頭に進めていきたいと思っております。

○議長（杉原豊喜君）

1番朝長議員

○1番（朝長 勇君）〔登壇〕

反転授業そのものについては、もうこれで終わりにしたいと思うんですけども。

これも先ほど上田議員からも出ていましたけども、土曜授業というものを、私の考えとしてはそういう保護者の意見もありはするんですが、拡張していく方向で検討していただきたいとは思っております。

その理由というのですがですね、こう私自身の経験を言わせていただきますと、ある講習会に参加しまして、それが講習を聞いて終わりっていうものではなくて、これは記憶法と言

いますか、覚え方、記憶術の講座みたいな感じだったんですけども、とにかくグループをつくって、みんなができるまで帰れませんという講座だったんです。みんなやはり、自分だけでできずに、みんなに迷惑をかけるんじゃないか、という恐怖感と言いますかですね、そういうのを抱くわけですね。自分だけできんんじゃないかと。みんなに迷惑かけるとやなからうかと。実際それが行われてみて、やっぱり速い人、遅い人っていうのが出てくる。

でも、最初にみんなができるまで帰れないっていうことになっていけば、できた人はできない人の心配をするようになる。そこで、非常に何かこう心理的な連帯感と言いますか、そういうものが生まれてくるわけですね。できない人を思いやる。できない人もできる人から教わったりと、そういう一緒の空間を、時間を共有することによって、非常に人間的なつながりも非常に出てくるっていうのは、私も実感いたしました。

そういう意味で、反転授業に限らずですね、義務教育レベルの授業というのは、できないというよりも、習得するのが速いか遅いかという問題だと私は思っております。そういう意味で、しっかりできない子もフォローしていく、できない子じゃなくて、遅い子をですね。

そのためには、時間っていうものがどうしても必要だと。地域とか家庭でフォローするとすると、どうしてもそこで家庭環境の差とか収入による差っていうのが出てくる。やっぱり塾に行ける子、行けない子。地域行事に参加できる子、できない子っていうのが出てくる。そういう意味で、やはり授業としてみんなが参加するっていう授業の時間を十分に確保してほしい、という思いがあります。

それとその授業の中で、自然体験やボランティア活動とか、そういう活動っていうのが子どもの好奇心を育て、結局学力の向上に効果があるということはもう、いろんなところでデータとしても出されております。

そういう意味で土曜授業の拡張っていうのを、きょうの新聞でも、先ほどありましたけども、出ていて、週休2日前提で地域行事等がもうできあがってしまって、なかなか急に対応ができない。また、学校側の先生方の勤務形態等の問題もあるというようなことも書いてありましたが、徐々にでもですね、やはり増やしていくっていう方向で考えていただきたいと考えておりますが、教育長の見解をお聞きしたいと思います。

○議長（杉原豊喜君）

浦郷教育長

○浦郷教育長〔登壇〕

1つは、冒頭言われましたようにですね、学習の課題にもよると思いますが、うまくいけばですね、学年によっては一緒の学習、残ってでもやりなさいという効果的な場合もあるかわかりませんが、すべてにそれが共通していい方法だとは私は思わないところもあります。

現在年間10回程度の、これ時間数にすれば30時間くらいなるわけですけども、それを

めどに各小中学校やってもらってまして、特にこれまで申しましたようにですね、親子ふれあい学習会とか、ふれあい道德の授業とかですね、職場体験とか、あるいは学習発表会とかですね。平日にやろうとしたら保護者の方もなかなか来にくかったところを、土曜日に持つてくることで、平日の授業が確保できるというような形での土曜日等の開校がなされているような状況を見ます。

そういう意味では、もう議員も御指摘のあったように、いろんな社会体育あるいは部活動等の絡みから考えますと、月2回というのは現実的には厳しいかなという判断をしております。また、放課後教室などで、もう一生懸命こう続けて継続して、これまで積み重ねてきてある地域もございますので、先ほど申しましたように、26年度についても10回程度というのが限度かなというふうに思っております。

○議長（杉原豊喜君）

1 番朝長議員

○1 番（朝長 勇君）〔登壇〕

土曜授業そのものですね、授業時間の確保というのが、私が今言った観点では目的ですので、土曜日に限らなくても、やるべきことの内容によって放課後とかですね、いろんな対応方法を柔軟に、今後は考えていってほしいとは思っております。

次に移ります。

道德教育について冒頭申し上げましたけれども、いろいろ一般質問の準備等を進める中でですね、非常に私がこう懸念するデータと言いますか、がありまして、これについてもっと道德教育っていうのですね、国のほうでも道德の教科化というのが検討されているようですけども、非常に大切と言いますか。知・徳・体とよく言いますけれども、道德という、どうしてもこう漠然とした感じがあって、何をするのが道德なのか、何をどうするかいろんな考えがあって、評価は、どう評価するかっていうのは非常に難しいということで、なかなかこうとらえどころのない教科でもあるかなと思っておりますけれども、それについて、私の考えをですね、述べてみたいと思います。

その前に、この質問をするに至ったちょっとデータと言いますか、日本青少年研究所っていうのが2011年、おとしです、に出した調査結果なんですけれども。

高校生に対して、私は価値のある人間だと思う、という問いかけに対してですね、赤が、全くそうだ。ピンクが、まあそうだ。緑が、あまりそうではない。黄緑が、全然そうではない。ということで、赤、ピンクが自分を肯定的にとらえていると。自分は価値がある人間だと。緑、黄緑っていうのが、否定的にとらえていると。自分は価値のない人間だと思っている。このアメリカ、中国、韓国、日本、この4カ国を比較したときにですね、肯定的にとらえている高校生が、アメリカは89.1パーセント、中国が87.7パーセント、韓国が75.1パーセント、日本が36.1パーセント。

これを見て非常に私はですね、ショックを受けたんですね。普通の勉強とか学校の活動とかでは、こういう面っていうのはなかなか、こう感じる事ができない。

このデータを見たときに真っ先に思い浮かんだことがですね、ここ3年ぐらいの間に、私の身近なところで、2人ほど自らの命を絶った方がいらっしゃいます。それぞれ、いろいろ事情はあったかと思えますけれども、直接的な原因よりも、障がい、つらいこと、困ったこと、障壁にぶつかったときにですね、乗り越える力の大切さっていうのを感じたわけです。やはりもう自分を価値があると思ってなければ、なんかつらいことあったとき、すぐやっばり逃げる。そういう弱さっていうのが日本の学生にはあるのではないかという危惧を抱いたわけです。

なぜこうなのかと考えたときにですね、歴史家のアーノルド・トインビーという歴史家がいらっしゃって、12、3歳くらいまでに民族の神話を学ばなかった民族は、例外なく滅んでいると。これアーノルド・トインビーという、はてなをつけているんですけど、これはちょっとこの、トインビーさんが、アーノルドさんが言ったかどうか、ちょっとこれは確証がどうもあやしいところがあるみたいなんですけれども、それで、ちょっとはてなをつけてるんですけど。ただ、この文章自体はいろんなところで引用されてて、非常にこう何か心に訴えるものがあるっていうのは確かだと思うんです。

そして、私たちが生まれ育ったこの日本っていうのを考えた場合に、戦後ですね、神話。古事記。日本で言えば古事記、日本書紀っていうのもアメリカの占領政策で教えなくなったと。ここに非常にこう関連があるのではないかと。これもちょっと証明する手段はありませんけれども、私としてはそう、もう感じたわけですね。それで……（「質問して」と呼ぶ者あり）はい。（発言する者あり）それで——はい、わかりました。

そしたらですね、このアンケート結果ですね、この価値のある人間と思うかどうかっていう結果に対して、教育長どう感じられますか。（発言する者あり）

○議長（杉原豊喜君）

浦郷教育長

○浦郷教育長〔登壇〕

ちょっと事前にいただいておりませんので。（笑い声）それこそ、感想的になるかわかりません。

この調査結果、よく出される資料でありまして、いくらかはですね、日本人らしい謙遜の部分もあるかなという気もするんですね。

武雄の場合調査してもですね、武雄の場合なんか結構低くなるんですね。遠慮したような、そんな私そんなことありません、っていうような感じの数値が出てきやすいんですね。だからそれを差し引きましてもですね、あるいはよその国の人の自信過剰な言動とか見ますとですね……（笑い声）いや、どこの国とは言っておりません。

なんかそういうところを差し引いたにしましても、やっぱり今言っているその自己存在感ですかね、自己肯定感ということは今頻繁に言われますけど、そのあたりが育ってないんじゃないかということは確かに感じます。その裏返しが、いわゆる道徳として教えなければいけない部分があるんじゃないか。教科化してでも、そのよさを認めていくということは必要じゃないかという論議になってきていることだろうか。

すみません、感想的なことしか。(発言する者あり)

○議長（杉原豊喜君）

1 番朝長議員

○1 番（朝長 勇君）〔登壇〕

はい。そしたら、続き言います。

そしたらですね、戦前日本の人間教育っていうのはどうやって行われてたかというのがもう、実語教といって、中身は御存知の方多いかと思えますけども。これ25個ぐらい、こう説があるんですけど。「山高きが故に貴からず、樹有るを以て貴しと為す」と。この文自体は耳にしたことはあられるかもしれませんが。これが平安時代に……（笑い声）著者は不明なんですけどもつくられて、戦前まで1000年ぐらいは、もうずっとこの幼少期の教科書として、これを教えるんじゃないかっていうことですね。これが徹底的に行われたと。

道徳で何を教えるかっていう、なかなか教えようとする、やはり先生にもその規範って言いますかですね、変なことはできないと言いますか。変なことはせんにしても、例えば先生が立派なことを教えよって、例えば街で見かけたとき、たばこをポイ捨てしよったって。それじゃもう、その時点でもう壊れるわけですよ、その教育自体が。

やはり、その歴史や文化を背景としたものっていうのをしっかり伝えていく。そのためにも授業時間といいますか、時間の確保っていうのが必要だと思っております。

繰り返しになりますけども、古典の素読や神話っていうのをですね、私としてはぜひ、授業時間を拡張できれば取り入れていただきたいという思いを持っております。これについて、繰り返しかもしれませんが、再度見解をお尋ねします。(発言する者あり)

○議長（杉原豊喜君）

浦郷教育長

○浦郷教育長〔登壇〕

基本的にですね、やはり現在の教育で、やっぱり日本らしさっていうのは何なのかっていうのが、この国際化の中でやっぱり、逆に問われているという部分は確かにあると思うんですね。

そういう意味では、小学校の教科書から古典が入ってきたり、こうしてるわけでありまして。そういう面で、なんと申しますかね。そこに書いてあるようなこの、古典に学ぶこと。ある

いは先ほどの画面にありましたようにですね、やっぱり教えられることよりも、その人の行動に学ぶという、そういうことまで含めてですね、やっぱり子どもの道徳性考えるときに、逆に子ども大人にはね返ってくる部分ちゅうのを一緒に考えていくと。

家庭、第一義的責任、家庭にありますよと言っても、そう割り切るんじゃないくてですね、一緒に今できることは何なのかということを考えていくことかなと。感想でございます。

○議長（杉原豊喜君）

1 番朝長議員

○1 番（朝長 勇君）〔登壇〕

すみません、よければ樋渡市長、こういう教育に関してどういう考えを持たれているか、お聞かせ願えると助かりますが。

○議長（杉原豊喜君）

樋渡市長

○樋渡市長〔登壇〕

教育長と全く同じであります。（笑い声）

○議長（杉原豊喜君）

1 番朝長議員

○1 番（朝長 勇君）〔登壇〕

今ですね、そういう、こういう考えを非常にこう大切にするといいますか。日本の伝統文化をもう1回取り戻さんといかんということで、そういう活動いろいろ、そういう組織はいろいろあると思うんですけども。

その中の1つでですね、国民文化研究会というところの集まりに、私もちょっと研修会で参加させてもらったことがあるんですけども、やはりそういうところに参加される方っていうのは、非常に企業の経営者や役員の方っていうのは、非常に多く比率としては参加されております。やはり企業というものが、そういう人材を私は求めているっていうのを肌で感じます。

そういう意味でも、就職するにしてもやはりそういう道徳をしっかり教えられた人材っていうのは、経営者にとっては非常に魅力のある人材でもあると思います。

私自身、小さいながら会社を経営させてもらってましたけれども、やはり能力が高くても無断欠勤する、遅刻する、来るか来んかわからん、そんな人間はやっぱ、使い物にならんわけですね。たとえ能力は低くてもまじめに必ず毎日来る、欠勤するときは連絡を入れる。人として当たり前のことをきちんとやってくれるほうが経営者としては助かるわけです。

そういう意味で、道徳をしっかりやっていますよということもですね、学力と同じようにPRできると私は考えて取り上げさせていただきました。

古典の暗唱とかはですね、タブレットの活用も今後考えていけるかなと思って、取り上げ

させてもらいました。

こういう教育現場の環境について、これはですね、教育現場の環境っていうのは、先生方の子どもと向き合う時間をしっかり確保するという意味で、いつでしたかね、鉛筆の持ち方とか箸の持ち方とか今議会でもあがってましたけども、やはりそういう、学校に来るまでに教えておくべき事はきちんと親がやってくださいと、そういうのをきちんとやっぱり言う、言っていく、そして伝えていくっていうのが、まず必要だと思うんですよ。やはり毅然とした態度で親に接する。

今、風潮として、何か子どもが、子どもにとって問題、いじめとか体罰とかあると、どうしても教育委員会っていうのが矢面に立たたされることが多いですけども、実際の子どもを守る活動っていうのは、やはりPTAとして親と学校、先生と親、保護者っていうのが協力してやっぱりやっていくっていう意味では、やっぱり教育委員会のほうからしっかり親に対してもですね、多少厳しいことも言っていく。それが実際に現場にいる先生方が動きやすいって言いますかね、環境整備につながっていくのではないかと考えておりますが、これについて教育長はどう考えられますでしょうか。

○議長（杉原豊喜君）

浦郷教育長

○浦郷教育長〔登壇〕

この問題につきましてはですね、非常にいろんな考え方がありますし、私ももうちょっと現場の環境をよく把握しないと、答えづらい面がございます。

ちょっとこの問題については通告いただいておりますので省かせていただきます。（発言する者あり）

○議長（杉原豊喜君）

1 番朝長議員

○1 番（朝長 勇君）〔登壇〕

どちらにしてもですね、保護者の問題っていうのは、私非常に大きいと思うんですよ。この前の青少年育成関係の会議でもですね、子どもを叱れない親が多いということが問題になっておりました。

それでは次がですね、教育に関して、ここいろんな、何と言いますか、市長も教育にしっかり力を入れていくということで、教育監もその思いを受けて学力日本一を目指すという、本当に力強い言葉をいただいております。そういう意味でですね、今後いろんな予算、どうしても何かやろうとすると予算ということになってくると思います。

これは参考にまでに、まず過去の3年程度の普通会計に占める教育費というのを、ちょっと見ておいてみようということで、ちょっと整理してみました。武雄に関しては、去年の分

までちょっとデータが取れましたので、4年分ということで。今は校舎の改築等ですね。箱物が入るとぼんと上がりますので、単純に比較はできないんですけども、ほぼ横並びということですね、比率としては。小城市だけがちょっと飛び出ているかなという感じはしとりません。

やはり今後、非常に教育の持つ意味合いというのが非常に大きくなってくる。そういう意味ではですね、必要に応じて手厚い予算配分をしていくっていうことも必要だと思います。

それでは次の質問に入ります。市内の人材育成活用について。市内うちゅうのは職員の皆さんですね。

今回は中途採用者。要は民間にキャリアを持っている方。そのキャリアをどう活用していくか。またそれを、どう評価していくか。これはやはり中途採用者のキャリアっていうのは、ある意味市民の財産でもあります。これをどう生かしていくか。

そして、きちんと働いた人は評価してやるという仕組みが、働く側にとってもやりがいにつながっていくということで必要かと思って、今の現状をお尋ねさせていただきます。

○議長（杉原豊喜君）

樋渡市長

○樋渡市長〔登壇〕

ちょっとこの答弁に入ります前にね、ちょっと気になったのが、教育の予算の割合の話が出ましたけど、あれ全然あてになりません。っていうのは、例えば学校を、小城市がそうなんですけども、学校を建設するってなったときには多額の予算が投入されますので、それは一気に13.6パーセントになるんですね。学校の予算をしないときは、例えば八、何パーセントというふうになるんで、こういう比較は一番意味がないと思うんですね。

それよりも、予算ではなくてどういうことで、例えば評価をされるかということが僕は最も大事だと思っていますので、ちょっとあの数字がこう出てくるっていうのは、これ価格の問題じゃありませんので、ちょっとこれ誤解を与えかねないかなということは、私自身危惧をしております。

この次の市内の人材育成・活用の中途採用については、当たり外れがあります。当たる人は、とことん当たってます。以上です。（笑い声）

○議長（杉原豊喜君）

1番朝長議員

○1番（朝長 勇君）〔登壇〕

当然、人事、新採、採用というのはリスクを伴う。これはもう当たり前のことで、当たった人、外れた人……（発言する者あり）あれですけども、要はきちんと能力に合わせた昇進制度っていうのは、しっかり、これはもうやっぱり今後入ってくる方に対してのPRと言いますか、にもなると思います。

当たった人については、やっぱりきちんと評価していくんだという認識でよろしいでしょうか。

○議長（杉原豊喜君）

樋渡市長

○樋渡市長〔登壇〕

要は、何かな。やっぱ合う、合わないっていうのが、やっぱあるんですよ。だから、中途採用であろうが新採であろうが、この組織に、こう合わないっていう人もいる。合うっていう人もいます。

ですので、それともう1つが、例えばこの人は係長でもすごくよくても、課長になったらだめだよとか、課長でだめでも、例えば部長だったらいいよねっていうのも結構あるんですよ。ですので、そのポジションの問題っていうのはすごくあるんですね。ですので、そこを評価は、前田副市長以下しっかりやっていますので、そこは大丈夫だというふうに思っています。

それともう1点が、実際ですね、中途採用者でちょっと僕が気の毒だなと思っているのは、公務員の方が、例えば山田恭輔さんという人がいるんですね。いて、顔伏せてますけれども、この人はもともと公務員だったんで、こっちに来て事務作業っていうのは割とその延長線のできるんですけれども、民間企業と、例えば公務員の世界というのが本当にやっぱ違うんですよ。もう宗教でいうと、キリスト教とイスラム教ぐらい違うんですよ。だからそのときに無理に、こっちのね、流儀を、例えば事務はこうやれとかっていうのを当てはめると、せつかくいいものがつぶれてしまう危険性があるんで、そこはちょっとね、やっぱ見直す必要があるだろうっていうふうに思っています。

この中途採用を開始して、一番最初に古田君というのが入ってきてくれました。彼はすごく、やっぱりよくて、いろんな苦勞とかの話聞いたときにね、やっぱり最初はすごく、やっぱり戸惑ったという話もこう、していたんですね。ですのでなるべくこう、我々もこれ初めて中途採用、I・Uターンをするということだったんで、ちょっと我々としてもなかなか受け入れるね、システムができてなかったんですけども、だんだん蓄積が出てきたので、ここで給与体系も含めて、実際新卒で入った方と中途採用で入った方っていうのを少しやっぱ、最初は一緒がいいかなと思ったんですけど、分けたほうがもういいのかなということ、この頃思い始めています。

ですので、処遇についても一定分けたほうがいいのかなということも思っています。

最後にしますけれども、例えばうち、今もうシンガポールに帰りましたけれども、笠原さんなんかは、もうその典型なんですよ。彼が、最初からこう事務ということになると、それはさすがにちょっとやっぱ違うというふうに思っていて。彼は持ち前のフットワークとか営業力っていうのは、もともと1人ポジションで置いてるほうがいいっていうのもあるんで、

そこは一定の役所の、その昇進のところからいって外れたところにおいて、遺憾なく能力を発揮するということもあり得るんだらうなというふうに思っています。

ただし、図書館でも病院でも、これチームなんですよ、実際やるときってというのは、チームでやっていきますので、そうなった場合には、中途採用も新規もあまり関係ないんですよ。あるのはやっぱり人柄なんですよ。人柄です。（「人柄採用」と呼ぶ者あり）人柄採用。ですので、これからやっぱ人柄なのかということは思っています。

ですので、いろんなちょっと、いろんな複雑な要素があつてね。例えば、ちょっと私、当たり外れといつて非常に申し訳ない言葉を使ったんですけど、この部分ではとっても外れているけど、こっちの部分では大当たりというものもあるんですよ。その適正配置というのはちゃんとやっていこうと、このように思っております。

○議長（杉原豊喜君）

1 番朝長議員

○1 番（朝長 勇君）〔登壇〕

どちらにしてもですね、やはりこれは個人個人違う問題ですから、それを見極めてですね、適正に評価して、その本人のモチベーションが上がるような、能力を引き出すような人事制度を充実させていただきたいと思っております。

これはもうちょっと、先の話に――次はですね、重複するかもしれませんが、チームワークとなると、もう自然にできるのかなと思いますが、中途採用者っていうのは、一般企業で考えればやはりその人の持っているスキル、それを買うっていうイメージで、もう即戦力に入れるというのが大体、一般企業では、そういう考えで中途採用っていうのを取るわけですけども、やはりその場合は、中途採用っていうのは、能力はあるけど年齢が上だから先が短いということで、能力、持てるスキルをいかに若い人たちに移転していくかという意味での継承。これについては、何か具体的に取り組み等あればお教え願います。

○議長（杉原豊喜君）

樋渡市長

○樋渡市長〔登壇〕

これ、ノウハウの継承って、実はすごく簡単なんです。これは、仕事をさせればね、このノウハウというのは、おのずと継承されるんですね。

例えば図書館の問題があつたときに、実際ですね、非常に失礼な言い方になるかもしれませんが、錦織さんが担当したんですね。そしたら、あの図書館、最初はできないとか言ってたんですよ。病院のときは、平川さんっていう人。今、企画課長ですよ。この人も最初、やれと言ったら、いや私なんかできません、とか言ってるんですよ。だけど、1年たつて2年たつたときに、爆発的な伸びをしたんですね、うん。

ですので、やっぱりですね、中国大使だった丹羽宇一郎さんが、あの中国大使としては

大したことなかったんだけど、伊藤忠の経営者としては物すごいやっぱり経営者で、彼と1回話したことあるんです。本にも書かれていますけど、人は仕事でしか鍛えられないって。です。いい仕事、これは大きいとか小さいとか別にして、いい仕事にいい上司がいれば、部下は必ず鍛えられます。ですので、そういう環境をちゃんとやっばつくる必要があるだろうというふうに、こう思っているんですね。

それとこの前、ディー・エヌ・エーの南場智子さんと一緒だったんですね。私、慶応義塾大学でシンポジウムで一緒だったんですけども、南場さんたちが取り入れているのは、1週間かばん持ちをさせると、トップの。これって全然違いますよ、っていうことを結構、社長さんおっしゃってるんですよ。ですのでトップの、市役所で言うと私ですよ。トップの、かばん持ちという言葉が適切かどうかはわかんないんですけども、なるべく一緒にいるようにすれば、そうするとね、ものすごく伝わるものがあるっていうふうに、いろんな人たちからこう聞いていて、それもそうかなということは思いました。

私自信の経験で言うと、某大臣にお仕えしたときに、もう誰もが知っている某大臣にお仕えしたときにしばらくかばん持ちをして、これが私の12年間の役人人生の中で、最もやっぱ、いい経験に。あ、こういうふうに大臣は意思決定をするんだ、とか、あ、こういうふうに物事を説明するんだ、っていうのが、その経験がなかったときに、こんなに私も今、言える立場じゃないぐらいに勉強させてもらったんですね。

だから、そういう環境を我々執行部がちゃんとつくるとのことだと思っんです。だからこれはマニュアルとか何とかの問題、研修とかの問題じゃなくて、日頃の仕事でいい仕事を我々がする。そこにいい仕事にいい上司がいて、そこで背中を見てね、あるいは仕事ぶりを見て、もうおのずと鍛えられるというふうに認識をしております。

それは、平川課長でも錦織さんでも実例がいますので、彼らは本当にいい上司になると思います。第2の平川とか錦織さんっていうのが、次々にこう増えていくというのが、武雄市の市民の福祉の維持向上に、僕は直結するというふうに確信をしております。

○議長（杉原豊喜君）

1 番朝長議員

○1 番（朝長 勇君）〔登壇〕

私もですね、武雄市の職員の皆さん方、非常に高い能力を持った方がそろっていると感じしております。それをですね、しっかりこう盗ませる環境をつくるというんですかね。そばに置いてやって、そういう環境づくりで。

また、どんどんやはり年数がたつと人は入れ替わりましたので、そういう人材育成、ついでもしっかり行っていただくことをお願いしまして、私の質問を終わります。ありがとうございました。

○議長（杉原豊喜君）

以上で、1番朝長議員の質問を終了させていただきます。

以上で、本日の日程は……

[24番「議長、24番。議事進行。閉会前に絶対お願いしたい」]

24番谷口議員（発言する者あり）

朝長議員、よかですよ。

○24番（谷口攝久君）

黒岩議員が朝、黒岩議員が議事進行を出されまして、この後ですね、されると思ったんですけども、そのときに申し上げようと思って、私はちょっと資料だけ持っております。しかし、なさらないということでございますので、機会を失うといけませんので、記録にぜひ、とどめたいからですね、このことは議事進行の中ではっきり申し上げたいと思います。（発言する者あり）

内容についてはよろしいでしょうか、質問して。

○議長（杉原豊喜君）

議事進行、私に取り計らいを言ってください。

○24番（谷口攝久君）（続）

そういうことです。

実はですね、きのうの私の質問の中で、

_____ [発 言 取 り 消 し] _____

_____（「これは一般質問の中身やんね。議事

進行じゃない」と呼ぶ者あり）教育委員会にそうしとったわけです。

ところがですね、いや私、そのことについていわゆる説明をせんとですね……（「やめらせんば」と呼ぶものあり）

[樋渡市長「いやいや、議事進行やないじゃないですか。一般質問じゃないですか」]

私がいかに嘘をついたようなことを言われたんではですね。

○議長（杉原豊喜君）

静かに、静かにして。静かに。

○24番（谷口攝久君）（続）

私だけじゃなくて議会が、それを嘘をついた質問をしてるように思われてはいけませんので、名誉のためにきちんと言いたい。（発言する者あり）

〔樋渡市長「もう、議事進行じゃないじゃないか、これ」(「質問の中身じゃないか」と呼ぶ者あり)

説明したい。ということをですね——静かに聞きなさい。その資料を、資料。

○議長(杉原豊喜君)

静かに。静かに。谷口議員……

○24番(谷口攝久君)(続)

資料をですね、教育委員会に提出を求めておりましたけれども……

〔樋渡市長「これ議事進行じゃないじゃないですか。おかしいじゃないですか」〕

やっと、きょうになって手元に入りました。それをですね、議長に提出をして、資料があったことについて議事録にとどめてほしいということで、私が議事進行を申し出をしたわけです。

〔樋渡市長「いやいや、それはおかしいじゃないですかそれ。議事進行じゃなか」〕

(「そがんすんなら、誰でもするくさん」と呼ぶ者あり)

議事進行というのは、議事を正確に進めるためのものの進行ですから……

○議長(杉原豊喜君)

静かに。もうやめてください。はい、わかりました。(発言する者あり)

〔樋渡市長「ひどいね」〕

○24番(谷口攝久君)(続)

見てみますか。

○議長(杉原豊喜君)

はい。はい。どうぞ、席……(「全然議事進行になっとらん」「もう閉会させて」と呼ぶ者あり)

今の24番議員の議事進行につきましてはですね、本当は上田議員の一般質問の当初に3分か4分遅れました。そのときに24番谷口議員とは、いろいろこう打ち合わせ、話をしながらね、一般質問の中で足らんやったけん、それをまた議事進行で説明をすとか、今までそういうことをした事例がないと、ね。(「それは議事進行じゃなかもん」と呼ぶ者あり)です。ですから私はそれは、私にその資料があったら私に出してくださいと。それは私が当事者の関係部署に私が渡しますと。それで話をした、とじゃなかですかね。

〔24番「それは発言を記録に残そうと」〕

ですからそういう、したら今から……(発言する者あり)今から慣例になりますよ。ですから、私はそういう議事進行は私は許しませんと。(「そがんとは議事進行にならんもん」と呼ぶ者あり)

〔樋渡市長「議事進行になっとらん」〕

谷口議員とほら……

[24 番「あなた方の言ったことに対して」] (発言する者あり)

静かに。静かにしてください。

谷口議員、あのう私たちはね、議員から教授していただかなければならないんですよ。

(発言する者あり)

12 番吉川議員

[樋渡市長「ひどいね。もう何でもありやね」]

[24 番「法律違反ですから」]

○12 番 (吉川里己君)

議会の運営のやり方ですね、ちょっと議長にお願いをしたいと思えますけれども、先ほどの谷口議員が言われたのは、きのうのですね、一般質問の中身のことなんですよ。

[樋渡市長「そう」]

これはもうここで打ち切っておかないとですね、みんなこういう質問しますよ。(「そうそう」と呼ぶ者あり) 議事進行、こういう内容でよかったら、みんなですね、一般質問の中身を言いますよ。

だからここはね、きっちりと整理していただいて、閉会していただきたいと思えます。

[樋渡市長「懲罰だな」]

○議長 (杉原豊喜君)

23 番黒岩議員 (発言する者あり)

○23 番 (黒岩幸生君)

まったくですね、私、今朝言ったのは、武雄市議会が無法地帯になってしまうと言ったんですよ。(笑い声)

だからいろんな、例えば公職選挙法違反っていう、どがんたとうとねという質問が入りましたと。あるいはまた、——何やったですか。(発言する者あり) 著作権問題ですね、こういう問題がなされたとに対して結論を出さんということはね、やっぱり議会として困るんじゃないですかと議長さんに言ったんですね。こういうことについてはやっぱりちゃんとしたほうが、傍聴者もいますので、整理しなければ武雄市議会の品位を落としますよと。品位とは言いませんでした。本当はもっと言いたかったんですよ。しかし、私きのうは伊万里市のほうに行っておりましたので、見てなかった、言いませんでしたけど。こういう取り計らいはちゃんとしてくださいということで、きのうのことは終止符を打ったんです。

いいときに、今度またそれをひもといてほしい、それは次の議会に生かすための議事進行を出したんですよ、私は。だから今のと、発言と全く違うっちゃうことは、それこそ私の名誉のために言っときますから。

○議長 (杉原豊喜君)

12 番議員と 23 番議員の議事進行については、本当こう貴重なですね、御意見を賜ったと

思います。

ですから先ほど言いましたように、こういうのは今から例になるということで、谷口議員とは、事前に私に資料を出してくださいと。私は担当部署にその資料をあげますという話し合いのもとに、私は済ましたつもりやったんですよ。

〔24番「いや、閉会してから言った——」〕

ですからあなたは、もういろんな、もう話をできないということですよ。（発言する者あり）もう信用できない状態になってきますよ、今から。（発言する者あり）

21番牟田議員

○21番（牟田勝浩君）

議長にちょっとお尋ねしますけども、議事録に残したいから、っていう言葉を言って議事進行を出されたら、議事録残すんですか。やっぱ自分の、これは議事録に残したいからと。私は議事進行いいと思いますよ。議事に対する進行だから、きちんと。でも、議事録に残したいから言います、という言葉を使って、して内容もああだと。そういうのは議事録やっぱ残すんですか。削除するとか何かないんですか。そこら辺のところをお尋ねしたいと思います。（「おかしかさい」と呼ぶ者あり）（「議事録に残すためにて先に発言してから言うたらいかんもん」と呼ぶ者あり）

○議長（杉原豊喜君）

議事進行の発言。すみません。21番議員の今の議事進行ですけど、議事進行ということで許可をしました。しかしながら全文がですね、議事録に残すためとか、そういう発言をしておられますので、秩序保持権の中で、議事録には残しません。（「そがんせんと、おかしかさい」「そいがよか」と呼ぶ者あり）